

何故、中国に出かけたのか？

留学も後半に入った2019年6月、授業でしばしば課された作文の題に、この中国に来て中国語を学ぼうとした理由を書きなさい、というのがあった。

2010年代の初め、私は東京都心の東側の勤務先に、池袋経由で山手線に乗って通っていた。朝はそれほど気にならなかったが、夜の帰宅時にこの電車で飛び交うアジア系の人々の会話が多くのに気づいた。まだほろ酔い気分の乗客が乗るには早かったのだろう、日本人の乗客は寡黙で、それと対照的に外国人のグループの声は大きかった。その多くは中国語を話していた。後で分かったが、中国語は抑揚をはっきりさせることで言葉を伝える言語だ。そのため、どうしても声が大きくなる。その言葉が混雑した電車内に響いていた。

その頃、前後して中国を旅の訪問地とすることが多かった。そこで知ったのは、その人口の多さだった。地方都市に出向くと人口は日本のそれと比べ10倍規模で、日本の県庁所在地が数十万の人口なのに対し、かの地では数百万が当たり前と言う現実を知った。気がついて見ると、私達日本人の生活にはそのマンパワーのせいもあってか、中国製の商品が溢れ、直接中国人と向かい合わずと言えど、今や中国なしには生活が成り立たないほど、依存していることに気付いた。

ところが、その中国に対し、平均的な日本人の観方は芳しくない。沖縄の辺境、尖閣列島での衝突などが、中国の「膨張主義」と思う懸念を生んでもいる。しかも興味深いのは、ここ最近では中国人の対日感情は好転し、日本人の対中感情との間にギャップが生じていることだ。2018年9月、日本の「言論NPO」と中国の「国際出版集団」が05年から続く日中共同世論調査を実施している。中国人の対日感情が良い印象という項目で42.2%と過去五年間で8倍も良くなったのに対し、日本人の対中感情が悪いと言う回答は86.13%と高止まりしたままなのだ。自分の周りの中国人と話しても、こういう現実を問題にしない人が多い。どこか、誤解を生じているのではないか・・・。

今やGNPで日本を抜き世界第二位の経済力をもつことになった中国は、私達にとっても運命共同体のパートナーであるとともに、一歩間違えれば大変危険な隣国にもなるのでは、と心配する。誤解を解くためにはどうすればよいか、良好な関係を維持するためにどうすればよいか、それを考えた時にコミュニケーションの大切さに改めて気づいた。これは何もビジネスや政治のエリートだけに必要とされるものではないだろう。私たちの日常生活でも、中国人の存在は広がっているからだ。今や日本の首都東京は、特に外国人旅行者が歩くその昼間は、外国語が飛び交いどこの国かと思うことさえある。郊外に目を転じて

も、中国出身の隣人と会うことも多くなっている。そうした人々が互いを理解しないで、暮らしていくとしたらまずいのではと思う。

ルドヴィコ＝ザメンホフ(Zamenhof)のことをご存じだろうか？百年前にポーランドに生きたユダヤ人だ。首都ワルシャワの東方、ビャウイストク(Bialystok)で生まれ育った彼は、帝政ロシア領だったこの街で、ロシア人、ポーランド人、ドイツ人、そしてイディッシュ語を話す同胞ユダヤ人とが、対立を繰り返すのを見て来た。その憎しみや偏見の主な原因が、言語グループ同士のコミュニケーションの断絶ではと見ていた。そこで、相互理解のための共通言語を作る必要に気づいた。こうしてエスペラント語が誕生したと言う。

現代には英語と言う共通語もあるが、ビジネスで日中双方がこれを使うとしても、庶民レベルでは使える人が少ないし、一方で双方には、漢字という共通の文字を使用して来た歴史もある。いっそのこと相手の言葉を使えるようになれば、それに越したことはない、私は思うようになった。こうしたことが、中国語を学習しようとした動機なのだ。

ところが外国語習得ということは、そう簡単にできるものではない。特に私の様なヨーロッパ文明に憧れを抱いて来た人間には、英独仏のような言葉にはあこがれもあったし、習いたいという十分な動機付けもあった。それに対して中国は20世紀後半だけで見れば、遅れていた国と映っていたし、何となく下に見て来た発展途上の国だった。私には積極的に中国語を学ぶという動機付けは乏しかった。

そこで考えたのが、現地で学ぶという後戻りできない環境に身を置く留学生活だった。2012年の夏8月には、中国は遼寧省の大連市に半月間の短期留学を行っていた。こういう勝手知ったる街があったことも、長期留学を進める気持ちを生じさせた。それから6年後の2018年秋、どこで中国語を学ぶかとなった時、長期の留学費用を捻出する上でも、北京や上海などと比べその費用を学費から生活費まで抑えることができる大連市の大学は、最良の選択となった。

今、世界は、中国の新型コロナウイルスの感染の行方を固唾を飲んで見守っている。中国で発生したトラブルを、世界規模で対応しなければならない事態に陥っている。そして日中双方の協力が益々欠かせないものとなっている。そうした際に国民としては相互不信を募らせることにならぬよう、どうしたらよいか？私は私なりに、相互理解の道を探っていきたいと思う。そうした手段として、相手の言語を学ぼうとしている。やや大袈裟だが、そうした思いもあって2019年の2月から、かの地へと出かけたのだ。